

〔論文〕

カラハリ狩猟採集民の狩猟技術

——人類進化における人と動物との根源的つながりを探って——

今 村 薫

名古屋学院大学経済学部

要 旨

旧人と新人が交替するにあたり、狩猟方法がどのように変わったかを推測するために、現代の狩猟採集民サンの狩猟方法を詳細に調査した。その結果、サンの狩猟方法は大型獣を狙った弓矢猟や槍猟だけでなく、小型の哺乳類や鳥類を対象に多種多様な猟法があること、狩猟を行う者は成人男性だけでなく、成人女性や少年たちも行って来たことが明らかになった。とくに少年は、4～5歳のころから『自然の読み取り方』を学んでいく。動物に関心を持ち深く観察してその心を読むというヒトに特有な能力は、ホモ・サピエンスの起源にまで遡ることができる。人と動物の関係は、人間の認識能力そのものの変革を促したという点で、人の進化と深く絡んでいると考えられる。

キーワード：狩猟方法、カラハリ狩猟採集民サン、自然の読み取り方、人類進化

Hunting Technique among Kalahari Hunter-Gatherers

—— The Role of Primordial Man-Animal Connection on Human Evolution ——

Kaoru IMAMURA

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

1 はじめに

ヒトの進化において、狩猟は重要な位置を占めてきた。一口に狩猟といっても、どんな動物を

(哺乳類、鳥類、爬虫類、魚類、また、大型か中・小型か)、何を使って(槍で、弓矢で、棍棒で、罠で)狩るのか、誰が(男性が、女性が、子どもが)どのように(単独で、あるいは集団で)狩猟をおこなうのか、その方法はさまざまである。このような狩猟方法の変化が人類進化に果たした役割は極めて大きい。

旧石器時代のヨーロッパにおいては、旧人(ネアンデルタール人)と新人(ホモ・サピエンス)の2種類の人類が数万年にわたって同所あるいは異所に住んでいたが、3万年前を境に旧人は絶滅し、新人のみが生き残ったといわれている。この旧人と新人の「交替劇」において、この2種類の人間の狩猟方法の違いがクローズアップされている。

すなわち、中期旧石器時代の旧人は、遺跡から出土する動物化石から示されるように、大型草食獣をおもに狩猟しており、文化の多様性に乏しい。一方、後期旧石器時代以降の新人は、大型草食獣に限らず様々な食物資源を利用しており、狩猟対象となった小動物の種類も非常に多い(Richards & Trinkaus 2009; Kuhn & Stiner 2006)。

また、ジョン・ファたちは、ネアンデルタール人絶滅の原因の一つが、大型哺乳類から野生のウサギなどの小動物へと、狩りの対象を変えられなかったからであると主張している(Fa et al. 2013)。ネアンデルタール人は、柄付きの槍や棍棒を使っていたが、これらの狩猟具はウサギを捕まえるのに向いていなかった。対照的に、初期の現生人類は、投槍や弓矢などの投擲具を使っていた。これらはいずれも、動きの速い小型動物を倒すのに優れている。

ジョン・ファたちは、初期の現生人類において、ウサギを狩っていたのは、多くは女性や子どもではなかったかと推測している。女性たちは、男性が大型哺乳類を求めて狩猟の旅に出ている間、キャンプに留まって小動物を狩猟していたと考えられる。

さらに、ジョン・ファたちは、初期新人の狩猟には、イヌを使っていた可能性も指摘している。現在の考古学では、遺跡からのイヌの骨の出土を根拠に、イヌの家畜化は1万2000年前としている。しかし、遺伝子レベルでみると、イヌがオオカミから分かれた時期は、3万年前にさかのぼり、新人がヨーロッパで小型動物をも狩猟の対象に始めた時期に一致する(Fa et al. 2013)。

化石人骨の同位体分析からも、ヨーロッパの旧人は地域や時代によらず大型草食獣を主要な食料源としていたが、初期新人は水産物を含む多様な食物資源を利用していたことが示唆されている(Richards & Trinkaus 2009)。

このように、新人は、狩猟具において、また狩猟の結果得られた食糧において、明らかに多様な食物選択を示しており、環境や食物資源を包括した自然を認識する能力が発達していたことがわかる。大型哺乳類から中・小型の哺乳類へ、あるいは鳥類、魚類へと狩りの対象を増やすことは、足跡や食性、声などの動物の習性や行動についての知識を増やすだけでなく、さまざま植生、地形、天体、気候について知っていることが必要である。このように、自然の中を歩き回りながら細部にわたって自然を認識すること、すなわち、『自然を読み取る』技術の革新が、新人に至って飛躍的に起こったと想像される。

本研究では、カラハリ狩猟採集民サンが、『自然を読み取る』技術をどのようにして獲得するかを明らかにすることを目的に、サンの狩猟方法、狩猟技術を現地で調査し、彼らの自然認識の

全体像を把握した。

2 調査方法

ボツワナ共和国ハンシー県ニューカデにおいて、狩猟採集民セントラル・カラハリ・サン（グイとガナの2つの言語集団から成る）を対象に、2013年8月11日～9月3日の約3週間現地調査を実施した。狩猟技術について、彼らが伝統的な生活を送ってきた過去の狩猟方法の聞き取り、また、現在の狩猟方法の観察を集中的に行った。

サンといえばキリン、エランド、ゲムズボックなどの大型哺乳類を獲物とした弓矢猟や槍猟に注目されがちだが、じつは、日常的に仕掛ける罟猟は着実に肉を得る手段である。今回の調査では、とくに多彩な罟猟についての資料を集めた。成人の男性が行う狩猟だけでなく、成人女性が行う狩猟、少年たちが行う狩猟についても観察と聞き取りを行った。

また、著者が1988年より現地において集めている狩猟方法に関する記録と資料も随時参考にした。

3 セントラル・カラハリ・サンの狩猟方法

彼らの猟法を、表にまとめた（表1, 表2）。これらの表は、菅原（2000）が作成した哺乳類名、鳥類名のリストをもとに、私が猟法を記入したものである。菅原は、カラハリに生息する哺乳類について「（その動物を）食べることが可能か否か」を男性43人女性53人にインタビューしている（菅原 2000）。菅原は、哺乳類34種+ネズミ類+コウモリ類のうち、アフリカスカンク、リカオンと、ネズミ類、コウモリ類についてのみ、全員が「食べない」と答えたが、その他の動物、たとえばライオンやヒョウに至るまで「食べる」と答えた人が必ずいたと報告している。スカンクは、その強烈な臭いゆえに、食べる人はおらず、ネズミ類、コウモリ類は肉が小さすぎて食す対象に入っていない。（リカオン食べない理由については不明。）しかし、少年たちは、かなり小さな動物や小鳥でも、可能な限り捕獲してその肉を食べている。

3-1 大型哺乳類

大型哺乳類を対象とした狩猟方法には、かつては弓矢猟があったが、現在は、槍猟にとっかわった。

A 弓矢猟：この猟法は、単独で行う場合が多い。矢の飛距離である10メートル程度まで獲物に忍びよって毒矢を放つ。矢には矢羽根がついておらず、命中率が高いとはいえない。矢尻には、1930年ごろまでは、動物の骨や角（キリンの肩甲骨、ゲムズボックの角、ダチョウの足の骨など）が使われたが、このころから徐々に金属（鉄）がバンツーとの交易などにより導入されるようになった（大崎 2001）。鉄製の矢尻の形も、「返し」がつく形になったのは、1960年ごろからである（大崎 2001）。

表1 セントラル・カラハリの哺乳動物と狩猟方法

目	和名 (学名)	狩猟方法*		
		成人男性	成人女性	少年
偶蹄目	キリン (<i>Giraffa camelopardalis</i>)	A,B,C,D(幼)		
	エランド (<i>Taurotragus oryx</i>)	A,B,C,D(幼)	D(幼)	
	ゲムズボック (<i>Pryx gazzella</i>)	A,B,C,D(幼),H	D(幼)	
	クーズー (<i>Tragelaphus strepsiceros</i>)	A,B,C,D(幼)	D(幼)	
	アカハーテビースト (<i>Alcelaphus caama</i>)	A,B,C,D(幼),H,I	D(幼)	
	ウシカモシカ (<i>Connmochaetes taurinus</i>)	A,B,C,D(幼),H		
	スプリングボック (<i>Antidorcas marsupialis</i>)	A,D,I		
	ヤブダイカー (<i>Sylvicapra grimmia</i>)	A,D,H	D,(H)	
	イシカモシカ (<i>Raphicerus campestris</i>)	A,D,H	D,(H)	
	イボイノシシ (<i>Phacochoerus aethiopicus</i>)	D,E		
齧歯目	ケープノウサギ (<i>Lepus capensis</i>)	D	D	
	トビウサギ (<i>Pedetes capensis</i>)	D,F,G,H	D,G	
	タテガミヤマアラシ (<i>Hystrix africaeaustralis</i>)	D,E,K		
	ケープアラゲジリス (<i>Xerus inauris</i>)			K
	ネズミ類			K
食肉目	ライオン (<i>Panthera leo</i>)	J		
	ヒョウ (<i>Panthera pardus</i>)	D(幼),J		
	チーター (<i>Acinonyx jubatus</i>)	D		
	リカオン (<i>Lycan pictus</i>)			
	カッシュクハイエナ (<i>Hyena brunnea</i>)	D		
	ブチハイエナ (<i>Crocuta crocuta</i>)	D		
	ツチオオカミ (<i>Proteles cristatus</i>)	D,E		
	セグロジャッカル (<i>Canis mesomelas</i>)	D	D	
	ミツアナグマ (<i>Mellivora capensis</i>)	D		
	ジェネット (<i>Genetta genetta</i>)	D	D	
	ケープギツネ (<i>Vulpes chama</i>)	D	D	
	オオミミギツネ (<i>Otocyon megalotis</i>)	D	D	
	ホソマンゲース (<i>Galerella sanguinea</i>)	D,E,K	D	K
	コビトマンゲース (<i>Helogale parvula</i>)	D,E,K	D	K
	リビアネコ (<i>Felis libyca</i>)	D	D	
	サバクオオヤマネコ (<i>Felis caracal</i>)	D	D	
	ツチブタ (<i>Orycteropus afer</i>)	D,E		
管歯目	アフリカスカンク (<i>Ictonyx striatus</i>)			
有鱗目	サバンナセンザンコウ (<i>Phataginus temmincki</i>)	E		

* 狩猟方法については本文を参照。

矢毒を使うが、この毒は甲虫 (*Diamphidia simplex*) の幼虫の体液から作る神経毒である。毒が獲物に効くには数時間から20時間を要するので、ハンターは矢が命中してから獲物の逃げた方向や、足跡の特徴を記憶して、いったんキャンプへ帰る。

ハンターは、獲物の死を確認するまでは、水以外のものを口にできない。なぜなら、サンは、

表2 セントラル・カラハリの鳥類と狩猟方法

科	和名(学名)	狩猟方法*		
		成人男性	成人女性	少年
チドリ科	オウカンゲリ (<i>Vanellus coronatus</i>)	K	K	
キジ科	ホロホロチョウ (<i>Numida meleagris</i>)	D	D	
ノガン科	カンムリショウノガン (<i>Eupodotis ruficrinusta</i>)	K	K	
	クロエリノガン (<i>Eupodotis afra</i>)	K	K	
	アフリカオオノガン (<i>Ardeotis kori</i>)	K	K	
	ダチョウ科	ダチョウ (<i>Struthio camelus</i>)	D	
フクロウ科	アフリカオオコノハズク (<i>Otus leucotis</i>)	D		
ハタオリドリ科	ハイガシラスズメ (<i>Passer griseus</i>)			L,M,N
	オオスズメ (<i>Passer motitensis</i>)			L,M,N
	キクスズメ (<i>Sporopipes squamifrons</i>)			L,M,N
アトリ科	キイロカナリア (<i>Serinus flaviventris</i>)			L,M,N

* 狩猟方法については本文参照。

射手が食物を口にすれば、傷ついた獲物もまた、元気をとり戻して逃げ去ってしまうと信じているからである(田中 1971)。そして、翌朝、同じキャンプの男性数名で追跡隊を編成し、獲物を追跡する。獲物に追いつき、まだ息がある場合は、槍で心臓にとどめをさす。

この猟法は、1985年ごろまでには完全に廃れてしまった。その原因は、①獲物に気づかれずに10メートルまで接近するのは極めて難しいこと、②毒の扱いを失敗すると人間を傷つけ大変なことになるためなどが考えられる。

次に、槍を使う猟について説明する。槍猟には、犬槍猟と騎馬猟がある。槍先に使う鉄が貴重品であったせいで、セントラル・カラハリ・サンが槍を使うようになったのは、1950年代からである(大崎 2001)。槍を投げられる距離は、数メートル(5メートル以下)であり、槍だけで獲物を倒すことは不可能である。したがって、槍猟には、犬あるいは馬が必要である。槍を使った猟は、現在も行われている。

とくに、騎馬猟は、馬さえあれば「自然への知識」が、豊富でなくても獲物を仕留めることができるということで、現在、若者の一部が盛んに行っている。この場合の「自然への知識」とは、ブッシュの中だけで食糧や水を調達するための、植物や水場に関する知識のことである。騎馬猟の場合は、必ずロバ数頭に食糧や水を積んで狩猟隊を仕立てて行くので、このような植物などへの知識が必ずしも必要ではないのである。

B 犬槍猟：犬を猟に連れて行き、犬が獲物の動きを止めている間に人間が獲物に走り寄って槍で突き刺す。単独で狩りに行く場合は、自分の犬1~2頭連れて行き、男性3~4人で行くときは、犬の頭数も7~8頭まで増える。犬はとくに訓練するわけではないが、猟に何回か連れて行くうちに、賢い個体は獲物を追い詰める方法を覚えるようだ(池谷 1989)。犬をたくさん飼っていれば、猟犬に向く犬が出現する確率も増えるが、実際は、犬に餌をやるのも負担であり、一人で複数頭を飼っているサンは少ない。

C 騎馬猟：馬に乗って獲物に接近してから槍を馬上から投げる。あるいは、馬に追い詰められた獲物に、馬に乗っていない人が走り寄って槍で突く。馬が複数いる場合は、獲物を挟み撃ちにする場合もある。

馬さえ所有していれば、最も効率のいい猟法である。しかし、サンの居住地で馬を飼育することは、馬の餌と水の確保の点で簡単なことではない。

3-2 中型哺乳類

槍以外に、サンの男性がよく使う狩猟具は、棍棒である。ブッシュを歩いていて不意に遭遇した獲物や敵（蛇や肉食獣）を倒すのに最もよく使われるのは棍棒である。後述する罠にかかった獲物にとどめをさすのも棍棒である。

男性の場合、棍棒ではなく太目の「掘り棒」を棍棒のように使っている人もいる。掘り棒は、根茎の採集だけでなく、罠を仕掛けるときの落とし穴掘り、動物の巣穴を掘り崩すときなどに使う必需品なので、棍棒と掘り棒を持っている人、あるいは、太い目の掘り棒だけを持ち、この掘り棒を動物を殴るのに使う人がいる。

また、女性も掘り棒はブッシュには必ず携帯し、掘り棒で動物を殴って獲物として捕まえることがある。したがって、次の猟法を、男性だけでなく女性も行う。

D 棍棒あるいは掘り棒による撲殺猟：ブッシュにいて遭遇した獲物を、棍棒あるいは掘り棒で殴って倒す。動物の成獣だけでなく、幼獣を捕まえるときによくこの方法を使う。犬をとまなう場合もある。犬がいれば、より狩猟の成功率が増す。女性もよく犬を連れてブッシュに行くことがある。犬がいれば、女性でもアンテロープの幼獣は簡単に掘り棒で殴って捕まえることができる。

E 巣穴の動物を捕まえる猟法：夜行性で昼間は巣穴で休んでいる動物を、巣穴に槍を突っ込んで刺し殺す。この猟法は、トビウサギ、ツチオオカミ（アードウルフ）タテガミヤマアラシ、ツチブタに適用されるが、トビウサギは、次に述べるように特別の竿を使って行われる。イボイノシシは夜行性ではなく昼間も活動するが、敵に出会うとヤマアラシなどが掘った穴に逃げ込む習性があるので、穴に入ったイボイノシシを槍や棍棒で倒す。

F 鉤竿によるトビウサギ猟：トビウサギは夜間に採食活動を行い、日中は地中に掘った穴の中で休んでいるので、長さ4メートルぐらいの鉤竿でこれを引っかける。穴の入口に竿を固定してトビウサギが逃げられないような状態で、獲物の位置を目測して地上から、または入口から穴を掘り進めて捕獲する。（写真1）

G 懐中電灯を使うトビウサギ猟：夜間にトビウサギが活動しているところへ、懐中電灯を照らすとトビウサギは「目くらまし」を起こして動かなくなる。そのスキをついて棍棒などで殴る。筆者は、男性だけでなく女性たちもこの猟法でトビウサギを狩るのを見たことがある。

H 罠猟（ロープ型罠）：セントラル・カラハリ・サンの成人男性が、最も日常的に行う方法である。この罠は、サンの言葉でロープを意味する「グイ」と呼ばれるので、ここでは、「ロープ型罠」と表記する。この罠では、ヤブダイカー（ブッシュダイカー）、イシカモシカ（スティーンボック）などの主要な中型アンテロープを捕まえる。また、エランドやゲムズボックのような



写真1 トビウサギ猟



写真2 「ロープ型罠」の構造を見せるために作ってくれたもの



写真3 「ロープ型罠」の仕掛けの部分。ここを踏み抜くとロープが締まる。

大型獣も、この罠にかかることがある。

この猟法は、動物の足跡をよく読み、獲物の通り道を予測して罠を仕掛けるもので、「餌」などは使わない。複数種の動物が同じ道（いわゆる「けもの道」）を使う場合、一度仕掛けた罠で数種類の動物が取れる。

罠の構造は、掘った穴の上に「男の木」と「女の木」を組み合わせ、ロープを固定している「仕掛け」を輪にしたロープの端に固定したものである（写真2、写真3）。罠の上に枝、草、砂（とくに湿って塊になった砂）を載せて罠を隠す。ロープは、よくしなる枝に絡まっているので、動物が枝を踏み抜くと「仕掛け」が外れ、ロープが枝の弾力でよく締まるようになっている。罠にかかった獲物は、片足をロープに縛られたまま、この「跳ね罠」に宙ぶりの状態で発見される。罠の持ち主は、3～4日に1回程度罠を見回りに行き、獲物がかかっているのを発見すると、棍棒でとどめをさす。（写真4、写真5）

「ロープ型罠」は、動物が罠がかけてある道以外の場所を通れないように大がかりな「囲い」



写真4 棍棒で罾にかかった獲物のとどめをさす。
(写真提供：菅原和孝)



写真5 実際にかけられた「ロープ型罾」。「囲い」
によって、動物が罾の場所を通るように
誘導する。



写真6 アカハーテビースト用の、首を絞める罾
(広い空間に丸く針金を設置)

を罾の左右に設置してあり、数か月から数年間は、同じ囲いを使い続けることができる。(写真5) このように、いったん設置すると、定期的に罾を見回りに行くだけで、コンスタントに動物をとることができる。したがって、槍猟(犬槍猟と騎馬猟)と異なって、一回の猟でとれる獲物は小さいが、より安定した見返りを期待できる。また、罾にかかるヤブダイカーやイシカモカは、肉を食べるだけでなく、毛皮が衣服や寝具、風呂敷、敷物になる。これらの皮製品はかつては必需品であっただけでなく交易品や婚資として機能し、現在は、現金収入源である民芸品の材料になるので、罾猟は非常に重要である。

1 罾猟(大型獣の首を縛る)：これはとくにアカハーテビーストを狙ってかけられる罾である。アカハーテビーストの通り道に、この動物の首の高さに罾を仕掛ける。針金で丸く輪を描き、両端を木で固定しただけのシンプルなものである。罾そのものに複雑な仕組みはないが、その分、足跡や餌となる樹種、気候(風の強さ)などから、動物の行動を予測することが重要になる。(写

真6)

J 罾獵(トラバさみ): 巨大な鉄製の罾を、ライオン、ヒョウなどの害獣駆除に使うことがある。

3-3 小型獣あるいは鳥類

以下の猟法は、マングースやジリスのような小動物や鳥類を捕まえるものである。少年たちや女性がよく使う方法である。

K 罾獵(手の平型罾): この罾獵は、サンの言葉で「手の平」を意味する「ツェーカイ」と呼ばれるので、ここでは、「手の平型罾」と表記する。この罾は、人が指を曲げて手の平を上に向けた形をしている。「指」にあたる支柱のまわりに丸くロープをかけ、中心に餌をおく。餌を動物が食べれば、「仕掛け」がはずれてロープが縮まり、動物の首が締まる仕掛けになっている。

(写真7, 写真8)

現在も、コビトマングースを狙って、少年たちが盛んにこの罾を仕掛けている。餌にはトカゲの肉を使っていた。かつてはカンムリショウノガン、クロエリノガンを狙って女性が「手の平型罾」を仕掛けた。ノガンの餌には、アカシアの樹液を使った。

L 子ども用弓矢: 子ども(男の子)が2~3歳のころに、母親が小さなおもちゃの弓矢をもたせて遊ばせるが、その後4~5歳になると年長の少年と一緒に自分で弓矢を作り、鳥やトカゲを狙って弓を放つようになる。獲物に命中すれば、自分で料理(焚火近くに埋めて蒸し焼きにする)して食べる。少年は、12~13歳になるまで、おもちゃの弓矢で狩猟する。

M パチンコ: 少年たちは、タイヤのチューブから取ったゴムと木の枝でパチンコを作り、小鳥やトカゲ、マングースなどを狙う。

N 餌をまいて小鳥などをおびき寄せる猟法: これも少年たちの猟法である。鍋のフタなどに「つかえ棒」をして立てておく。このフタの下に、ひき割りトウモロコシの粉などを餌としてまいておき、小鳥がやってくると、フタを倒して小鳥を捕まえる。

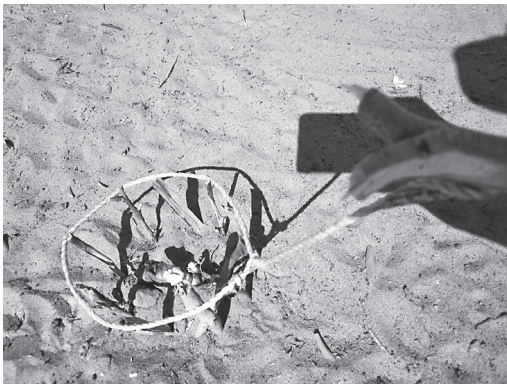


写真7 「手の平型罾」



写真8 「手の平型罾」を少年たちが実際にかけているところ。奥の穴は、コビトマングースの巣穴だという。

4 猟の実態

実際の猟は、さまざまな猟法を組み合わせながら、遭遇した動物に臨機応変に対応しなければならない。また、彼らはブッシュにいる間は、常に、野生動物が食する樹木や草の発見、これらの植物の食痕、動物の足跡や草の倒れ方、動物の糞などから、細かく動物の行動を再現し予測している。

以下に池谷（1989）の論文から、ある日のサンの男性の狩猟行動を例としてあげる。（動物の種名は、私が標準和名に書き換えた。）

①4人の男性が朝9時前に犬槍猟に出発。②イシカモシカの成獣を犬と槍で狩る。捕獲成功。③トビウサギ狩りを試みるが失敗。④ライオンの群れを確認しコースを変更する。⑤鳥の巣を発見し卵を採集する。⑥近くに親鳥がいるはずだと推測し、すばやく罾をかけて親鳥を捕まえる。⑦リビアネコを発見し、犬と棍棒で捕獲する。⑧イシカモシカの幼獣を棍棒で捕獲する。⑨ケープロウサギを発見するが狩らない。⑩イシカモシカの幼獣を発見するが狩らない。⑪雨が降りそうなので、昼過ぎにキャンプに戻る。

彼らは、午前中の4時間ほどの間に、イシカモシカ成獣1頭、幼獣1頭、リビアネコ1頭、鳥（おそらくノガンの仲間）1羽、卵数個を獲得したのである。

5 考察

5-1 サンの狩猟方法

今回の猟法に関する聞き取り調査の結果、以下のことが明らかになった。

1. 多様な罾猟の実態が確認された。罾猟では、これまで報告されてきたように、イシカモシカ、ヤブダイカーなどの中型哺乳類が中心であるが、さらに、アカハーテビースト、ゲムズボック、クーズー、ウシカモシカなどの大型哺乳類を狙った罾もあることがわかった。ダチョウ、アフリカオオノガン、カンムリショウノガン、クロエリノガンなどの大型、中型鳥類対象の罾もあることが確認できた。これらの罾を仕掛けるために、サンは動物の習性を細かく読んでいるのである。
2. 罾以外でも、足跡や食痕、砂、草の状態の観察によって、巣穴に入っているツチブタ、トビウサギなどを捕獲する。イボイノシシを穴へ追い込んで捕獲することも行う。
3. 罾猟や犬猟を女性も行ってた。女性は、日々の採集の途中に罾を仕掛けたり犬を連れて狩猟したりした。とくに、罾猟のためのロープは女性が主に製作していたことから、女性が罾猟に重要な役割を分担していたことがわかる。
4. 少年たちは、遊びの一環として、小鳥の罾、中型鳥類の罾、マングースなどの小型哺乳類の罾を仕掛けることがわかった。これらの狩猟遊びは現在も行われており、このような体験を通して『自然の読み方』を学ぶ。

このように、サンの狩猟方法が多様であること、狩猟を行う者は成人男性だけでなく、成

人女性、また少年たちも行ってきたことが明らかになった。とくに少年は、4～5歳のころから年長の少年たちから自然の読み取り方を学んでいく。少年が自然の読み取り方を習得する過程の分析は、今後の研究課題としたい。

女性が狩猟を盛んに行うようになるのは、結婚後のことであるが、少女時代に成人女性と採集や狩猟といったブッシュでの活動を行うことによって、結婚前から狩猟方法を学んでいったようである。

狩猟全般においては、獲物を倒す運動能力だけでなく、猟場の選定や獲物の追跡のための観察力が重要である。弓矢猟や槍猟においても、まず、獲物を発見するために、次に、手負いの獲物を追跡するために、動物の行動を読み取ることが狩猟の成否を決める。また、ブッシュでは、採集も含めて、次々とさまざまなことが起きるので、このような自然の状況に対応しなければならない。

調査対象のサン（言語グループ名はグイとガナ）の言葉では、「オン」という「ブッシュへ食べ物を探しに行く」という動詞が基本である。狩猟については、「(弓矢で) 射る」「(槍で) 刺す」「(獲物を) 倒す」「(獲物を) 撲殺する」「(罌を) かける」と個々の動作についての動詞がある。採集についても、「(根茎を) 掘る」「(メロンなどを) 拾う」「(葉を) 摘む」「(木の実を) 摘む」のように、採集物ごとに動詞が異なる。

サンにとっては、ブッシュを歩き回って自然が発信する情報を読み取ること、自然と交流することがまず基底にあり、そのうえで男女とも臨機応変に狩猟や採集を行うのである。

5-2 人類史における人—動物関係

ホモ・サピエンスの能力を、ネアンデルタール人と比較した場合、動物に関心を持ち深く観察してその心を読むというようなヒトに独特の傾向が、ヒトの進化と深く絡んでいるのではないかと考えられる（シップマン、2013）。

氷河期のホモ・サピエンスは、数々の岩絵や、狩猟具に描かれた像や模様を残している。対照的に、ネアンデルタール人は、現代の北極圏の狩猟採集民にもまして大型獣の狩猟に依存したことが知られている（Snodgrass & Leonard, 2009）にもかかわらず、捕食行為以外に人間と動物との関りを示すものは、まったく遺跡に残されていない。

氷河期におけるホモ・サピエンスと現在の狩猟採集民が、心理的にまったく同じであるとは断定できないが、サンなどの狩猟採集民においては、「予兆」「感応する」という言葉で自然と通じる回路を開いている（今村 2010）。それは、動物が自分の罌にかかったことを夢で知ったり、狩りでブッシュを歩いていて獲物に近付くと、ハンターの腋が燃えるように熱くなるような予兆を感じることである。彼らが語る物語りにおいて、動物はしばしば人間の言葉で話し、人間にこれからその土地で起きることを教えたりする。このような野生動物との関係において、もはや動物は、人間の食の対象から離れ、自然を共有し、何かを伝えあう存在なのである。

このようなヒトと動物の関係を、「自分は動物と話しができる」と表現する民族もおり（山口 2012）、世界各地の狩猟採集民の研究において、さまざまな程度で「実際の」コミュニケーション

ンを含む親密な関係が報告されている（奥野 2011, 奥野他 2012）。

以上のようなヒトと動物の関係は、人間の根源的な認識能力へと発展するものである。動物や自然を人間とみなす「擬人」化の過程は、人間自身への見方の変革も促す。自然を読み取ることが、自然との交信であり、自然とのコミュニケーションであるとするならば、このことは、模倣や心の理論の理解、擬人化などとも関係する人間の認識論上の重要な問題をはらんでいるのである。

付記

本論文は、2013年度名古屋学院大学短期研修による研究成果の一部である。

引用文献

- 池谷和信（1989）「カラハリ中部・サンの狩猟活動：犬猿を中心にして」『季刊人類学』20(4)：284-332
- 今村 薫（2010）『砂漠に生きる女たち—カラハリ狩猟採集民の日常と儀礼』名古屋学院大学総合研究所研究叢書24, どうぶつ社
- 大崎雅一（2001）「セントラル・カラハリ年代記」田中二郎編『カラハリ狩猟採集民：過去と現在』京都大学学術出版会, 71-114頁
- 奥野克己（編著）（2011）『人と動物、駆け引きの民族誌』はる書房
- 奥野克己, 山口未花子, 近藤祉秋（編）（2012）『人と動物の人類学』春秋社
- バット・シップマン（2013）『アニマル・コネクション—人間を進化させたもの』河合信和訳, 同成社
- 菅原和孝（2000）「ブッシュマンの民族動物学」松井健編『自然観の人類学』榕樹書林, 159-210頁
- 田中二郎（1971）『ブッシュマン：生態人類学的研究』思索社
- 山口未花子（2012）「動物と話す人々」『人と動物の人類学』奥野, 山口, 近藤（編）, 3-28頁, 春秋社
- Fa JE, Stewart JR, Lloveras L, Vargas JM (2013) Rabbits and hominin survival in Iberia. *Journal of Human Evolution* 64, 233-241.
- Kuhn SL, Stiner MC (2006) What's a Mother to Do? The Division of Labor among Neandertals and Modern Human in Eurasia. *Current Anthropology* 47, 953-980.
- Richards MP, Trinkaus E (2009) Isotopic evidence for the diets of European Neanderthals and early modern humans. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 106, 16034-16039.
- Snodgrass JJ & Leonard WR (2009) Neanderthal Energetics Revisited: Insights into Population Dynamics and Life History Evolution. *PaleoAnthropology*, 220-237.